

「古文書昆虫学」の提唱

—鳥取藩大庄屋中島家文書を事例として—

深川 博美

はじめに

本研究は、歴史学に蓄積された壮大な知識と、歴史史料に巻き込まれ幸運にも時間を越えて保存されてきた昆虫類に関する分類・生態学の知識を融合させた、今までにない新しい研究「古文書昆虫学」の第一歩となる報告である。

近代化以前の日本では、昆虫類は人々と共に生活していたため、読書空間や蔵という古文書の近く、または和紙の紙漉現場などにも数多くの虫体¹⁾や抜け殻が存在し、自然と古文書近辺にその体が残されていた。一方、現代において古文書から見つかるそれらの虫体は、文化財の視点によって害虫として処理されるか、気づいたはずみにフツと息で吹き飛ばされるかの存在であった。したがって今まで歴史学、昆虫学の双方でこの虫体という存在が注目されることはなかった。

そこでこの虫体に着目し、歴史学および古文書学からのデータである「史料データ」と昆虫学における生態的なデータ「昆虫データ」を合体してみたところ、生活環境や紙漉の様子、珍種の発見、さまざまなシナントロプ²⁾、江戸時代の「蟲譜」と虫体のシンクロナイズなど、当時の様子が現れはじめた。ここに、すべて害虫と判断されていた存在を「メッセンジャー」へと転換させ、そこから新しい知見を追求する可能性が示唆されたのである。

本論では、鳥取藩因幡国岩井郡浜大谷村（現在の鳥取県東部）で大庄屋をしていた中島家文書における調査を中心に報告する。本文書群は浜大谷村の屋敷内に残されていたものである。昭和40年代に空き家となり、老朽化で母屋ごと取り壊す際に土蔵から発見された史料群で、現在は鳥取県立博物館で保管されている。

尚、本研究は先行研究がないため、研究の展開や考察の元となる区分設定や単語等は著者が独自に作成している。

第1章 各データについて

第1節 史料データの収集

史料データとは史料の来歴、史料名、文書形態、文書種類、年代（時代区分およびわかる場合詳細年代）、仮目録ナンバーなどのことである。今回調査した文書は博物館に寄贈された史料群であるため史料データの多くは博物館の作成した仮目録を参考にした。調査した史料総数はおおよそ3000点以上、近代史料が全体の約三分の一を

占める。

第2節 昆虫データの収集

昆虫データとは、発見された虫体の種類、虫体形状および生態学的特性のことである。虫体が発見されたらナンバーを付与後その状況を撮影し、虫体を採取し形状を観察する。昆虫類の名前を調べる同定は顕微鏡を使用し可能な限り種まで行った。同定困難な種については分類学の先生に意見を仰いだ。

第2章 区分について

区分は史料データ（文書形態）と昆虫データ（虫体形状）から虫体を3つに分けたものである。以降この虫体別に考察を進める。

- ・漉虫体：和紙の中に漉き込まれた虫体、またはフィールドサイン³⁾
 - ・内虫体：史料の中で圧死した虫体、またはフィールドサイン
 - ・外虫体：史料の表面に付着または立体形状の虫体、およびフィールドサイン
- これらの区分は基本的に下記の表により判断される。

表1 文書形態と虫体形状による区分表

文書形態 虫体形状	巻本・冊子・折本 (層をなすもの)	継紙 (折目が存在)	一枚物
立体	外虫体（微小甲虫を除く）	外虫体	外虫体
平面	内虫体	内虫体	外虫体

虫体形状の平面とは、過去の人のアクションによって残存した虫体を想定するものである。立体はその形状自体がすでに虫体やフィールドサイン共活動状態で存在していたと判断できる。

文書形態において紙が層をなす史料は、本に挟んだしおりが落ちないのと同様、内部に虫体を保持しやすい条件を持っている。また、折り目が存在するか否かの条件設定については、折り目のあるほうが物理的に史料内に虫体が残存しやすいという理由によるものである。

第3章 各虫体別の史料データ

第1節 漉虫体と鳥取藩因幡国の紙漉事情

和紙の作成中、紙の中に漉き込まれたことを意味する

漉虫体は、当時（史料年代頃かそれ以前）の生存種であり、その生態によって当時の紙漉環境、人々の生活状況などが復元できる。調査した文書群が存在した鳥取藩因幡国は紙漉きの郷である。戦国末期には農家の副業として公用紙が漉かれ、正倉院文書には最古の因州和紙も伝わる。また和紙は多くの藩で専売制がとられており、鳥取藩でも他国への和紙の移出入を禁止する記録が複数残されている。このため当時この地で使用されていた和紙は地産地消であったと考えてよい。環境についてみると、製紙法は秘密事項の色合いが強く、具体的な記録が極めて少ない。幸い多く残されている紙漉屋の絵図などから見ると、どの時代もおおよそ人家およびその周辺で作業をしている風景が多く描かれている（版本の場合も江戸期であれば地産地消の和紙と成作環境は大きく変わらないとみてよいだろう）。よって、本研究において版本を除く写本の古文書から発見される漉虫体は因幡国の人家周辺に生息していたものと判断した。

第2節 内虫体と中島家文書の来歴

内虫体は史料の移動や読書などが原因となり圧死状態で見つかる虫体である。種類やデータ数増加によって当時の人々の人家環境や活動などが推測できる。内虫体は漉虫体と違い移動可能であり、人々の史料の扱いが直接虫体の発見位置と関係してくる。そのため史料の来歴が重要となる。

今回調査した文書群は鳥取藩因幡国の大庄屋中島家のものである。250年弱屋敷の土蔵に保管されていた。この家は初代が慶長期（1596～1615年）にこの地域へ移住している。武家を由緒とする仏門に熱心な近世上農層で、先代は後世に学習の重要性を説く複数の覚書を残している。知的階級（僧侶・医者）の身分を輩出し、結果医書などの専門書を含む多くの蔵書類が残った。写本も目立ち、借用や写本作成の技術入手などを行う愛書家も存在した。蔵書に含まれる古活字本は、全国のものとは比べると伝来がシンプルで来歴がわかりやすく、古い出版の部類に入るのが特徴である。また、日記類も豊富で160年にわたり保存されている。その一部は、藩によって先例調査で活用もされている。

国文学研究資料館の公開情報には、保存に関しては「1、土蔵内・長持入」「2、良好・一部不良」、利用に関しては「1、日本林政史料に一部所収済み」「2、ほとんど利用されず」とあり、慶安元年頃から明治7年頃までの史料群となっている。直近の史料に昭和44年のものがあるため、追加最後の年代は昭和40年代頃と思われる。多種多様な史料が保存されており、物を捨てるのが偲ばれる家風が感じられる反面、ネズミの跡や、水が掛かり硬化した本も多数あることから、古文書が使用されなくなってきたからの保存状況は良くなかったようである。それは上記の保存の状態を示す一部不良にも現れている。

よって、近世では積極的に使用されたが、それ以降はほぼ活用がないといえるであろう。

これらのことと古活字本の特徴から、本文書群は地域性の指標を持っているといえる。また古文書類は近世と近代が半分ずつ含まれているため、近代化前後の時間軸も持っている。

第3節 外虫体について

当時生息地として史料を使用していたことを示す虫体。史料年代との関係は他の虫体より薄い、特徴ある種類のデータの増加によって年代との関係性が保たれ、漉虫体や内虫体についての情報補強ができる。また古文書と似た枯死木を好む昆虫類の生態（天敵・生態・外来種）の新たな発見につながる。内虫体と同じく来歴が要求されるが、同様に料紙の物理的、化学的な特性（利用可能性）も重要となる。

第4章 出現虫体別による考察

現段階では未同定が多いため同定できた種から取り上げる。

第1節 「漉虫体」

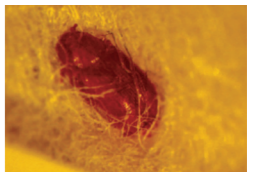
①コクゾウムシ *Sitophilus zeamais*

1647年～1703年（正保4～元禄16年）刊行年の古医書の版本から成虫が発見された。本種は米を好むため現代でもシナントロプである。版本のため本種の生息地は不明。成虫は11月から3月の間は野外で越冬するため、本種が生きた状態で和紙に入る場合11月から3月の農閑期以外である。また硬く残存しやすい遺体が漉き込まれたと考える場合、現場周辺に彼らの遺体が違和感なく存在する環境が想像される（彼らの好む米粉は紙漉の行程で使用されていた）。どちらの場合も大規模な紙漉現場を想定すると都合が良い。これは版本にとっての和紙の安定供給という側面と合致しそうであり、今後は本種と版本に着目したデータ収集から明らかにできそうである。

本データから、現代でも家の中で見られるコクゾウムシは、江戸前期の紙漉場に米粉を狙って顔を出していたことがわかった。

②キクイムシ科の一種 *Cryptophagus*属

成虫が1819年（文政二年）の日記の写本から見つかった。漉き終えた和紙に着地し、その上から次の和紙を重ねられた様子であり、触角のような取れやすい器官も残っている。写本であることと、本種は内虫体としても複数見つかることから17世紀鳥取県東部のシナ



ントローブといえる。しかし現代では枯木・ワラなどを好むという生態以外ほぼ知られない野外の昆虫となっている。それは現代も人家に備蓄される米を目的とするコクゾウムシに対し、本種の目的であるワラは現代家屋に存在しないからだろう。人々の生活変化はシナントローブの変化も起こしていることがわかる。また、キクイムシ科は菌との結びつきが大変強い為、数世代前の日本人は現代身の回りに存在もしない菌と生活していたことを示す。さらに菌類の多様性は下記のクモ類の数からも豊富だったと想像される。

よって本種のデータは、人々のライフスタイルに応じてシナントローブ及び周囲の菌類が変化したことを示す。また、本属が澁虫体として現れること自体が、様々な民俗資料や記録から知られる通りワラが生活の中で豊富に使用されていたことを表している。

③コカゲロウ属 *Baetis*属

脱皮殻が1913年（大正二年）の大福帳から発見された。カゲロウをはじめとする水生昆虫は水域の水質調査に利用される環境指標動物である。今回発見された本属の幼虫は河川のような水の流れを好む流



水性種であることが知られているが、季節については1年間に複数脱皮を行うため特定できない。殻に破損が見られないことから、上陸して乾燥することなく直接水中に漂っていた所を汲み上げられたことがわかる。よって、大正時代の鳥取県東部で使用された和紙は澁槽の作業においても川の水が使用されていたことがわかる。海外などの製紙においても、昆虫類が澁き込まれている場合、その種類や状況から当時の情報が得られるはずである。

第2節 「内虫体」

①クモ目 Araneae

少なくとも16種類が見つかり、その数は当時の人家周辺の生物多様性を示している（表2）。イヨグモは現在非常に珍しい種であり、本調査で初めて雄が確認された（写真）。またワシグモ科sp.Aはイヨグモと並ぶ希少種の可能性が高く、イトグモも現代では上記2種ほどではないが減少してきている。これらはいずれも、現代では希少種となり、抜け殻の発見が多いという点から、かつて古文書や土蔵付近に生息していたシナントローブと推測される。彼らはキクイムシ科と違い野外



表2 内虫体クモ類と史料データ

No.	種名	史料年代および年代幅	文書形態一種類	備考	写真	No.	種名	史料年代および年代幅	文書形態一種類	備考	写真
441 381 522	イヨグモ	近世年間、1732年（享保十七年）～、1914年（大正三年）～	冊子一蔵書 継紙一古文書 冊子一近代	外虫体と未確認データと不良データを合わせて計45点。うち殻が40点。		425	ヤマシログモ	1647（正保四年）～1703年（元禄十六年）	冊子一蔵書（医書）	計1点発見。不良データだが前後が正確であるため掲載。	
434 521	イトグモ	1660年（万治三年）～、1913年（明治四十六年）	冊子一蔵書 冊子一近代	外虫体、未確認データ、不良データ合わせて計40点。うち殻が35点。		525 505	チリグモ	1675年（延宝三年）～、1874年（明治七年）	冊子一蔵書 冊子一近世終わり	計3点発見。明治7年までの史料使用から、505は辛うじて近世か。	
509 518	ワシグモ科 sp. A	1728年（享保十三年）～、1888年（明治二十一年）	冊子一日記 冊子一近代	518は外虫体。外虫体、未確認データ、不良データ合わせて計16点。うち殻が15点。		510 516	ヒメグモ科sp.	1730年（享保十五年）～、1911年（明治四十四年）～	冊子一日記 冊子一近代	計3点発見。	
528	ユカタヤマシログモ	1762年（宝暦十二年）	冊子一日記	計4点発見。全て本体。		482	シラヒゲハエトリ	1701年（元禄十四年）～1725年（享保十年）	冊子一古文書	計3点。	
500	シモングモ	1811年（文化八年）	冊子一日記	計3点発見。イエユウレイグモと同所で確認		504	ナルトミダニグモ	1874年（明治七年）	冊子一近代	計2点。	
423	エビグモsp.	未確認データ	冊子一不明	計1点発見。口に同種の子グモあり。		454	ネコハグモ	1872年（明治五年）	冊子一蔵書	計1点。	
471 501	イエユウレイグモ	1734年（寛保三年）～、1811年（文化八年）	冊子一日記 冊子一日記	計3点発見。シモングモと同所で確認		462	カニグモ科sp.	近世年間	冊子一蔵書（謄本）	計1点。	
439	ネコハエトリグモ?	1779年（安永八年）	冊子一蔵書	計1点。		480	ヒラタグモ	1741年（寛保元年）	冊子一古文書	計1点。住居（巢）。	

「不良データ」「未確認データ」については⁴⁾

（写真協力：鳥取大学 鶴崎展巨先生）

からの発見も乏しい。もしこれらのクモ類が他種よりもその生態において人間の生活空間や文化と緊密な関係を持っていたとすれば、昔の人家環境（古民家等）を内装や文化ごと保存することが希少な家屋性クモ類の保全に有効とも考えられる。チリグモは3点の虫体が見つかったが、現在では鳥取県を含む日本海側での分布は確認されていない。移動性の低い近世文書から見つかることから、近世から明治維新直後の鳥取県には生息していた可能性がある。このようにクモ類のデータ収集は、珍種や神出鬼没な種についての貴重な考察材料となる。

②イエバエ *Musca domestica* Linnaeus

元来身近であった本種は、都市の日常空間ではあまり見られなくなった。理由は近代化に伴う徹底した殺虫処理と衛生概念の普及だろう。しかし今回の調査で古文書から8匹も発見された。このことから近代以前には1匹残さず駆除する対象ではなかったことが虫体を通して伝わってくる。現代を生きる我々は「本にハエが挟まるだろうか？」と違和感を感じる。普通ハエは閉める前に逃げるだろうし、人もハエのような大きな昆虫なら払ってから本を閉めるだろうと。しかし、複数が挟まった状態で見つかること自体に、現代とほんの少し前の日本人の間でハエをめぐる捉え方の違いが現れている。ハエという「以前身近だった昆虫」が古文書から複数出てくることから、古文書内部は昔の虫を内包しているといえるだろう。

③シミ目 *Zygentoma*

「本の虫」といえば本種が想像されるだろう。現代の家屋では主にセイヨウシミとヤマトシミが見られる。セイヨウシミは現代に勢力を拡大しヤマトシミを駆逐しつつある外来種といわれるため、古文書から見られる種類はヤマトシミと予想されたが、予想に反してセイヨウシミがヤマトシミに匹敵するほど見つかる（表3）。近代にやってきたセイヨウシミが一斉に文書に入り込んだと想定することも可能ではあるが、表のように複数が内虫体としてみつかることから、江戸期にはセイヨウシミがすでに日本にいたと考える方が自然である。もし両者

表3 内虫体シミ類と史料データ

No.	昆虫名	史料年代	文書形態一種類	備考
20	セイヨウシミ	1744～1746年（延享元年～三年）	冊子一日記	
24	セイヨウシミ	近世	冊子一宗教家系	
70	セイヨウシミ	1783年（天明三年）	冊子一日記	
74	セイヨウシミ	1760年（宝暦十年）	冊子一日記	
131	セイヨウシミ	近世	和本	未確認データ
131	セイヨウシミ	近世	和本	未確認データ
131	セイヨウシミ	近世	和本	未確認データ
131	セイヨウシミ	近世	和本	未確認データ
143	セイヨウシミ	1911～大正か（明治44～大正か）	不明一近代	
20	ヤマトシミ	1744～1746年（延享元年～三年）	冊子一日記	セイヨウシミ20と同史料
33	ヤマトシミ	1834年（天保五年）	冊子一暦	
49	ヤマトシミ	1878年（明治十一年）	冊子一近代	
248	ヤマトシミ	1866年（慶応二年）	冊子一日記	
263	ヤマトシミ	近世?	冊子一古文書	
336	ヤマトシミ	1878～1889年（明治十一～二十二年）	不明一近代	

「不良データ」「未確認データ」については注⁴⁾

に長い共存の歴史があったとすれば、現代通念の二者対立は考え直さなければならない。本の虫である本種の歴史を、過去の物流（シルクロードや仏教伝来）の視点から世界の古文書調査を行ったとしたら、さらに新しい発見があるに違いない。

④カツオブシムシ科 Dermestidae

家屋に縁のある種類である。今回はチビケカツオブシムシとヒメマルカツオブシムシの2種の幼虫に着目した。チビケカツオブシムシは体が小さくヒメマルカツオブシムシと比べその姿は現代では稀である。また、ヒメマルカツオブシムシは体に鉾状毛という武器を持つが、チビケカツオブシムシは持たない。出現年代を見ると明治維新付近を境にチビケカツオブシムシからヒメマルカツオブシムシに変化するのわかる（表4）。チビケカツオブシムシは、恐らくなんらかの移動手段で明治維新後にやってきたヒメマルカツオブシムシと対峙したのだろう。

表4 内虫体カツオブシムシ類の史料から見た時代変遷



「不良データ」「未確認データ」については⁴⁾

各データ/年代 166016801700172017401760178018001820184018601880190019201940

シミ類と違い、片方が武器を持つシナントロープがこれからの歴史をどのようにたどり、折り合っていくのだろうか。この疑問は、時間軸を持つ本研究のデータ蓄積と現代のシナントロープ調査によって解き明かされる。カツオブシムシ科は明治維新あたりの時代を示す「示準種」の様相を見せるシナントロープである。

⑤「蟲譜」

江戸期に今でいう昆虫図鑑の役割を果たしたのが「蟲譜」である。代表と言うべき『千蟲譜』の著者栗本丹洲（1756－1834年）は幕府の侍医であり、葉を扱うなかで家の周辺など身近な昆虫類を本書へ詳細に記録している。そのため古文書から出てくる家の虫と「蟲譜」は共通点が多い。「蟲譜」はその美しさからチョウやトンボ、セミやコオロギといった人気の種で評価されているが、現代人が存在すら知らない家の虫についても優れた描写が残されている。この描写は小さな生き物を身近に見つめるまなざしから生まれたのだろう。まるで古文書から出てくる昆虫類が「蟲譜」という当時の人の視点と混ざり合うかのようである。それは現代の害虫図鑑にあるぎょっとする異常発生状況写真の視点とは違い、どこことなくユニークさを感じさせるものである。

下記に『千蟲譜』『蟲譜図説』と内虫体の種が合致した一部を並べる。(写真にスケールがある場合すべて1mm)

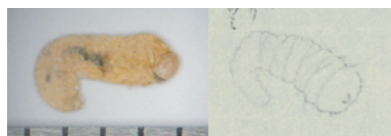
コクヌスト *Tenebroides mauritanicus* (『千蟲譜』:「米蛆」)

『千蟲譜』では米にくる虫とされ、本種(幼虫)は「冬春ウグイを釣るに此のものを用いるによしといふ」と書かれており、当時の人々にとって本種が身近だったことを想像させる。古文書から出てきた本種は『千蟲譜』から同定できたほどである。現代の人家ではほとんど見られなくなった。



フルホンシバンムシ *Gastrallus immarginatus*

(『千蟲譜』:「書蠹」) 幼虫が書を食べる虫として、江戸期から認識されていた。本種は古文書から発見されるため駆除対象にされているにもかかわらず、生態的知見は乏しく、野外では滅多にみられない。過去のシナントロープという知見以外その生活史は謎が多い。



チャタテムシ類 Psocoptera

(『千蟲譜』:「アツキアライ」「カクレザト」)

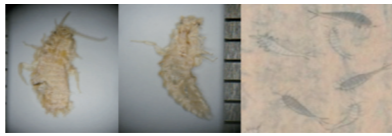
写真はコチャタテムシである。『千蟲譜』には「多きときは雨声の如し」とあり、高温多湿の時には盛んにその

「声」が聞かれたという。昔の家には障子と外界の静けさがあったため、本種の出す音を身近に聞く事ができたのだろう。



シミ類 Zygentoma (『千蟲譜』:「蟬」・「衣白魚」・「書魚」ほか)

『千蟲譜』に「書筐に生し害をなす形魚の如し」とあり、魚に似た書籍の近くにいる虫という認識がなされている。その名の通り動きが魚のように素早い。絵図ではセイヨウシミとヤマトシミの区別は判然としない。(写真左:ヤマトシミ、右:セイヨウシミ)



ノミ類 Siphonaptera (『千蟲譜』:「蚤」)

絵図はヒトノミと思われる。写真のヒトノミは内虫体として延宝六年～延享四年の史料から見つかったものである。ノミ類はヒトノミ以外の種類も複数見つかった。日本では昔から人家になじみ深い虫で枕草子にも取り上げられるが、現在はネコノミが主流となりヒトノミは姿を消したといわれている。



イヨグモ? Prodidomus rufus (『蟲譜図説』:「シホリヒラタ」)

「シホリヒラタ」という名前で『虫譜図説』に掲載されているクモがイヨグモに近い姿をしている。本種の生態はほとんど不明であり、専門的な知見からはこの絵図で本種と同定するのは難しいとの判断を受けたのだが、『蟲譜図説』では特に昆虫の腹部をふっくらと描く癖がみられるため、絵図と並べると似ているように感じられる。



第3節「外虫体」

①ヒメマルカツオブシムシの殻

古いダンボール箱の断面の隙間に複数のサイズの脱皮殻が確認された。ダンボールの隙間は身を隠しやすいうえ保温性があり、素材には餌となるデンプンも含まれるため昆虫類にとって好ましい素材である。ダンボールは近代に発明され物流の世界を変えたアイテムだが、その誕生と拡大は彼らの生息地拡大にも大きな変化を与えた可能性がある。

②天敵類

中でも寄生蜂の仲間が複数確認され、いずれもシバンムシを宿主(寄生相手)にしている。また寄生蜂以外にも肉食性甲虫幼虫や、ダニ類も発見された。これらは、ページをめくると徐々に姿や環境が現れるため、枯死木といった物理的に生態調査がしづらい分野における昆虫種の新知見を含んでいる可能性が高い。

おわりに

今回の調査において同定された数点の結果からではあるが、歴史学においては過去の生活環を復元し、昆虫学においては過去の時間軸の提供に成功した。内虫体から時代性についてのつながりや考察展開が可能であったことから、帰納的に内虫体は時代性を持つと結論づけられたことは大きい。今回扱ったどの種もこれからの研究の嚆矢であり、今後はデータベースを中心に未同定種、様々な場所や文書種類のデータなどを蓄積し、さらなる歴史学へのフィードバックも含め発信していく予定である。

本研究で取り上げた虫体は人間が意図的に残す昆虫標本と違い、予測不能な存在である。人間の認識下でない世界で姿を残す彼ら全てがそれぞれのメッセージをもつ。本研究のフィールドとなる古文書類はまだ全国に残されており、貴重な虫体もまだ日本各地で眠っている。知られぬ間に廃棄される前に一刻も早くこの虫体を救いだしねばならない。

彼らは、タイムマシンとなり得る強靭さを持った和紙、生産から使用まで物を大切に扱う人々、虫の存在を許す時代、これらがあって初めて存在する「メッセンジャー」である。

尚、本研究は生き物文化誌学会の助成金「さくら基金」を受けている。

[注]

- 1) 節足動物(昆虫以外のクモ類なども含む)の遺体を指す本研究独自の単語。
- 2) 人間の生活と伴って生きる生物のこと。
- 3) 果や抜け殻、フンなど生物の存在を示すもの。
- 4) 「不良データ」と「未確認データ」について。本調査は仮目録作成前の搬入時から開始したため仮目録に最終的に未記載となった史料も調査に含まれる。また、目録登録者がナンバーと史料名を作業中ずらしてしまったこともあり、目録ナンバーのみとなり正確性が不明の史料データが全体の三分の一近くにのぼった。よってこれらについては本文中で「不良データ」と明記している。また「未確認データ」とは研究段階で管理者に質問中の史料データのことである。

[参考文献]

- ・若木剛「青谷の和紙の昔語り」総合印刷出版株式会社(2010)
- ・福井淳人「因幡の紙考一和紙の生産とその領土統制をめぐる一」鳥取郷土文化。特集 号/鳥取郷土文化研究会編(1)123-134,(1967)
- ・関義城「古今紙漉紙屋図絵」木耳社(1975)

- ・佐藤進一「新版古文書学入門」法政大学出版局(2011)
- ・大嶋陽一 四井幸子 芝田尚子「鳥取藩領因幡国岩井郡大庄屋中島家「御用日記」翻刻 その一」鳥取県立博物館研究報告(49),53-95,(2012)
- ・原豊二「中島家旧蔵書の世界」新収藏品展歴史系学芸員のオススメ一〇〇選企画展 50-52,鳥取県立博物館(2010)
- ・松坂守 石向稔 坂本新一郎 宮ノ下明大 今村太郎 中北宏「玄米貯蔵倉庫に於ける貯穀害 虫の季節的変動について」家屋害虫 31(1),27-36[(2009)]
- ・久米康生「和紙文化誌」毎日コミュニケーションズ(1990)
- ・内田一「本邦に於けるセイヤウシミ *Lepisma saccharina* LINNAEUSの再検討」植物及動物11(12),8-10(1943)
- ・吉井良三「ヤマトシミに就いて」動雑51(10),677-682(1939)
- ・青木国夫他「千蟲譜」江戸科学古典叢書41恒和出版(1982)
- ・栗本丹洲「千蟲譜」服部雪斎(国立国会図書館デジタルコレクションインターネット公開資料)
- ・深川博美「ダンボール箱の粘着テープに付着した昆虫類とカビ類の発見報告」文化財保存修復学会誌57.6-11(2014)
- ・Peacock.E.R. Adults and larvae of hide,larder and carpet beetles and their relatives (Coleoptera:Dermestidae) and of Derodontid Beetles (Coleoptera:Derodontidae).Handbooks for the Identification of British Insects.,vol.5.No.3.,36-37,114-139(1993).
- ・町田龍一郎 増本三香「日本産家屋性シミ目の同定法」家屋害虫,27(2),73-76(2006)
- ・伊藤修四郎「ヤマトシミについて(1)文献的考証(2)近縁種」(社)日本しろあり対策協会機関紙「しろあり」別刷

「古文書昆虫学」とは、深川博美氏が本論文で初めて用いた新造語である。一般に学術・研究においては安易な新造語は慎むべきであるが、ここではそれが許されるであろう。なぜなら本論文は、古文書を扱う歴史学、昆虫を扱う昆虫学の双方にとって、これまで全くその視野には入っていなかった新たな研究の可能性を提起したからである。

本論文の最大の意義は、古文書に付着している昆虫をシナントロープ(synanthrope人の生活圏で生息する生物)として捉え、古文書が過去のシナントロープを保存するタイムカプセルとしての機能を有していることを明らかにした点にある。本論文によって、古文書は文字情報だけでなく、過去のシナントロープの情報、さらにはそれを通して過去の人間の生活環境の情報をも含んでいることが、明らかにされたのである。今後、歴史学研究者と昆虫学研究者は、こうした情報をどのように扱うべきなのか、本論文はまことに大きな問題を新たに提起したといえよう。 [放送大学教授・杉森 哲也]



都会で虫探しをする昆虫少女だった私は、時が流れ博物館で資料の防虫をする職務(文化財IPM)に従事していたとき、本研究に出逢いました。彼らの本質と世間や業界の常識の落差に衝撃を受けたため、研究の志を胸に放送大学を受験したのですが、内心、昆虫学の内容を携えて歴史学の扉を叩く私が面接でどう判断されるか不安でした。しかし杉森哲也先生、五味文彦先生に評価をいただき、ここに一つの学問として一歩踏み出すことが叶いました。本研究は生まれたての研究、学問ですので、まずは多くの方々に古文書昆虫学が社会の役に立つ存在と認識いただけるよう、本論文を出発点として研究や普及活動の継続に邁進したいと思います。 [深川 博美]